「加茂人」の足跡

縄文土器

石皿

石鏃（せきぞく）（弥生時代）

石錐（いしきり）

石庖丁（いしぼうちょう）

旧石器時代 ＞ 縄文時代 ＞ 弥生時代 ＞ 古墳時代

縄文時代 約16,000年前

弥生時代 紀元前3世紀

古墳時代 3世紀

動物や魚を捕り、
木の実を採集していた。

ナイフ形石器

食べ物を土器で
煮て食べていた。

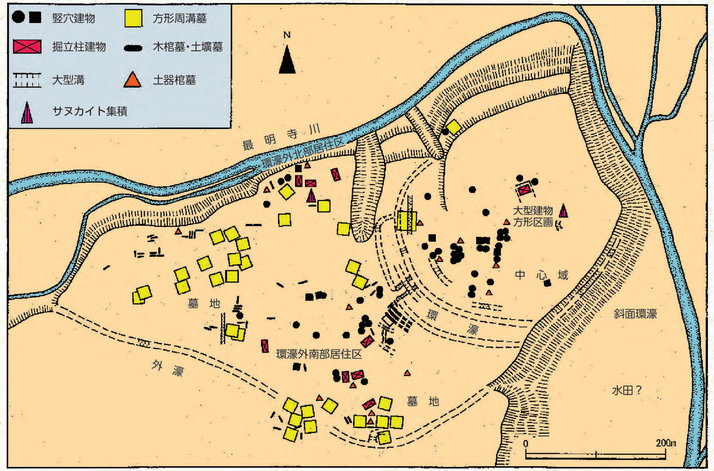
石鏃（せきぞく）（縄文時代）

弥生土器

石斧

銅鐸（高さ114cm）
この銅鐸は鴨神社東側斜面下部で1911年に発見され「栄根銅鐸」と言われています。現物は東京国立博物館で所蔵され同じ大きさのレプリカが川西市文化財資料館に展示されています。

※これらの石器類等は全て加茂遺跡から出土したものです。



加茂遺跡（弥生中期）地図

加茂遺跡は弥生時代中期が最盛期で約500人が生活していたと思われます。大きさは、東西800m、南北400mに楕円形で環壕に囲まれて居住区、墓地に分かれており、中央部の大型建物に行くには、西側の環濠入口の橋を渡って入っていたようです。

加茂小学校区コミュニティ推進協議会 加茂遺跡クラブ
〒666-0025 川西市加茂3丁目13番23号　TEL 072-757-0210
2021年3月発行

川西市教育委員会事務局
教育推進部社会教育課 協力

川西市文化財資料館 資料提供
〒666-0026
兵庫県川西市南花屋敷2丁目13番10号
TEL 072-757-8624

「宮川石器館」
〒666-0025
兵庫県川西市加茂2丁目10番24号

参考文献「川西市史」

参考文献「加茂遺跡」岡野慶隆 著

加茂遺跡の出土品については「宮川石器館」に多数展示されています。来館希望の方は事前にご予約ください。
※小学生のみのご来館はご遠慮ください。

TEL 072-759-9077

入 館 料：無料
開館時間：10:00～16:00
休 館 日：日曜日、祝日、年末年始

加茂歴史散策

加茂歴史散策

加茂遺跡ってどこですか？

1.加茂台地

加茂台地は、伊丹台地の北東端にあたります。約10万年前頃は伊丹台地の一部分は海面下にあったといわれています。しかし今から3万年前、一旦北上した海で入江ができ粘土が堆積しました。その後、猪名川や武庫川のほか、長尾連山から流れる最明寺川、天神川などの土砂による自然の埋め立て作用で砂れきが海を埋め、隆起を繰り返した後、猪名川の侵蝕(しんしょく)により崖が形成されたのが加茂台地です。古くは旧石器時代のものですが、約2万年前に使用されたと思われるナイフ形石器が発見され、実物は加茂の村の中にある「宮川石器館」・「川西市文化財資料館」に展示・保存されています。恵まれた自然・生活環境の中で、加茂台地を舞台として様々な歴史が展開されてきました。

下から加茂台地を望む

2.加茂遺跡の発見の経過

①今から110年前(1911年)に加茂台地の山裾(やますそ)より大型銅鐸(どうたく)が畑の中から偶然発見されました。それまで加茂遺跡の存在は知られていませんでしたが、大正時代には鴨神社周辺の桃畑で多量の弥生土器、石器が発見されるようになりました。当時鴨神社周辺は殆ど桃畑であったようです。桃畑の草かりをしていると土器や石器のかけらが多く出てきたとの事。「チャリン」と独特の音がすると、それは「矢じり」で畑の表面にも出てきていたようです。

②行政も1960年代より調査に入り、旧石器・縄文時代から奈良・平安時代に至る集落跡や最盛期の弥生時代中期の集落が約20ヘクタールにも及ぶなど実体が明らかになりました。続いて1992年には、鴨神社北側で方形区画を伴った大型掘立柱建物跡の検出、1994年には斜面

加茂遺跡航空写真

環濠(かんごう)の検出等が相次ぎ、2000年には鴨神社周辺が重要地として国の史跡に指定されています。遺跡保存の為その後も追加指定されています。「弥生の集落」が徐々に明らかになってきています。

③当時の文書や書物は日本には残っていませんが、中国の古文書「漢書」「地理志」には倭国(日本)からの遣使を記し、倭国は百余国に分かれていると記されており、加茂台地の集落はその中の一つであった可能性があるとの説もあります。環濠等で守られた近畿地方を代表する大規模集落遺跡であり、大型掘立柱建物跡が発見された事からこの集落や集落の周辺地域のリーダー的存在となる首長の家があったのではと考えられます。邪馬台国よりおよそ200年も前に、もし川西一帯を治める首長がいたならば、当時の近畿地方がこれまで考えられていた以上に進んだ地域で邪馬台国が近畿にあった可能性も大きくなってきます。川西市はこれ以外に小戸遺跡や栄根遺跡も発見されており、まさに歴史ロマンを感じる所です。なお、遺跡の中心に位置する鴨神社の創建時期は明確ではありませんが、「延喜式(えんぎしき)」内社で平安時代以前から存在した神社とされ、古くから地域住民の安全や五穀豊穣を願う祈りの場所だったと思われます。御祭神は「賀茂別雷大神(かもわけいかづちおおかみ)」で京都上賀茂神社の御祭神と同じです。

加茂遺跡 斜面環濠

加茂遺跡 環濠入口

3.加茂にお城があった？

「信長公記」には1578年、荒木村重(むらしげ)の摂津国有岡城(伊丹)を攻めるために「賀茂岸砦(かもきしとりで)」(加茂城)が主に織田信忠の陣所として機能したと書かれています。

戦国時代、当初は池田氏に仕官する荒木義村(よしむら)(村重の親)の守る城があったと言われています。池田氏は摂津国では有数の国人で、大阪府池田市の平山城「池田城」を構築していました。その対面にあるのが加茂台地で急にそりあがったジャンプ台の様な崖があり自然の要塞のようになっていました。戦国時代になると、よりその必要性が増したものと思われます。池田氏は加茂村を代官地とし接収し、館や集落を形成して池田城を守る西の砦として活用、代官地を守るとの大義で家臣を住まわせていたようです。

加茂から池田城を望む

当時「加茂城」を任されていた義村は、信濃守を称して、池田六人衆の一人と記されています。後に摂津守となる荒木村重も元々は池田氏の家臣でした。時が経過し織田信長の家臣になった村重が信長に謀反(むほん)を起こし、伊丹にあった有岡城に立て篭もると、それを攻撃するため信長の嫡男「信忠」を進軍させ加茂城に入ったと記されているのです。信長は西国街道と古池田道で軍勢を進め両軍にて有岡城を孤立させたもので、高槻城・茨木城を落城させた後、池田城に入城し戦禍(せんか)を眺(ふもと)めていたようです。池田城は五月山の麓にあり、加茂城も有岡城も一望にする事が出来る所にあります。今でも阪神高速をまたぎ加茂台地から池田城がみえます。当時は通信手段として狼煙(のろし)、旗、鏡等で連絡をとりあっていたようです。加茂地域の中に旧加茂村字に「城屋敷」「城垣内」など

の小字(こあざ)がついていた時代があります。又、加茂地域は古くから有馬道(京伏見街道)・多田道・西国巡礼街道・池田道等交通の要所となってきました。村道が「古池田道」といわれる所以(ゆえん)です。今も右 小浜 三田　左 伊丹 西宮の道標が村の中に残っています。

古池田道　道標

4.加茂でお酒をつくっていた？

加茂台地は伊丹台地の北東端にあります。有馬山脈からの粘土質の強固な地質は井戸の素掘りも可能でした。地下水も出てきます。元々伊丹は清酒発祥地といわれますが加茂の地域内でも江戸時代は清酒の「つくり酒屋」がありました。江戸にも送られ人気があったようです。良いお酒をつくるには良い水が必要です。

加茂の村の中には今でも井戸を有している家が沢山あります。地下水が地表に出てくるのは加茂の「谷口」と言われる所です。そこには今でもヒメボタルの乱舞(5月〜6月上旬)する姿が見られるようです。しかし宅地化の波もあり、年々減少傾向にあります。粘土質の強固な地質は隆起した小高い山となり古くから戦略的に利用されてきました。伊丹総監部周辺には国史跡「伊丹廃寺跡」が残っています。金堂や五重塔を有する法隆寺方式の伽藍(がらん)配置の立派な寺院が建設されていましたが、信長の有岡侵攻にて焼失したとされています。

街道図

5.加茂井って何ですか？

加茂井は1654年小戸「天王宮」を取水口として猪名川より田畑への灌水の為、新溝を掘ったものです。川西市と池田市との境は加茂井とされています。猪名川が境目ではないのですね。米作りのために水は絶対に必要なものでした。日照りの時等、この用水をめぐっては、何度も争いがあったことが記されています。今も水を放流する日、止める日は加茂井組(加茂・久代・北村で構成)で相談して決定、上流の田畑から田植えをし、下流に流していくルールは守られています。加茂の村人が新溝を掘った事により田畑用灌漑用水(かんがいようすい)として19ケ村が恩恵を受けたと言われています。代官所の取り決めで水をせき止める時の杭の打ち方、石の入れ方等も定められていたようです。当時の加茂の賢人が高低差を調整しながら、土木技術を駆使し伊丹の田畑までを潤す(うるお)灌漑用水を作り上げた技術に感心させられます。当時の代官所でも高く評価されていたようです。

加茂井が作られてから367年、今も沢山の田畑を潤しています。その時代の労苦に感謝し記念碑が建てられている場所があります。鴨神社にご参拝の際には是非ご覧ください。階段を登りきった右側に記念碑とともに、小戸神社の上流にあった夫婦桶、栄根にあった「7つ石」が保存されています。

鴨神社加茂井記念碑